

# 学校を出てからも役に立つ 基礎的・基本的な地理的技能

駒澤大学名誉教授 中村和郎

## はじめに

平成20年の中央教育審議会の基本方針に基づいて改善された新しい学習指導要領の改訂のポイントは下の表に示す通りである。

### <社会科の改訂ポイント>

- (1) 基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得
- (2) 言語活動の充実
- (3) 社会参画、伝統や文化、宗教に関する学習の充実

### <地理的分野の改訂ポイント>

- (1) 内容構成についての見直し
- (2) 世界に関する地理的認識の重視
- (3) 動態地誌的な学習による国土認識の充実
- (4) 地理的技能の育成の一層の重視
- (5) 社会参画の視点を取り入れた身近な地域の調査

表1 学習指導要領の改訂ポイント

教科書はどう変わったのだろうか。

限られた紙面なので「基礎的・基本的な技能の習得」を中心に、教科書づくりに携わった者の1人として、思いの一端を述べてみたい。

## 2 新教科書の内容構成

平成24年度用『社会科 中学生の地理』（以下、新教科書）でまず、「もくじ」を見ると、2ページにおさまりきれないほど内容がぎっしりとつまっているが、大きく見ると、「世

界のさまざまな地域」（第1部）と、「日本のさまざまな地域」（第2部）という二つの部分からなっていることがわかる。世界が先習になっていることと、世界と日本の各地を学ぶ地誌的内容が多くなっているのは現行の教科書との大きな違いである。

世界と日本とは、どちらも1章から4章までで構成され、大筋ではよく似ている。

それぞれの1章にある「世界の姿」、「日本の姿」では、地球儀と世界地図を見ながら、緯度・経度・時差などのことや、大陸と大洋や、おもな国々と47都道府県のことをしっかりと学んで、世界と日本の白地図を自分で描けるようになることを目標としている。

早く諸地域のことを学びたいと思うかもしれないが、諸地域のことを学ぶときには、いつでも地球儀や地図（帳）を使い、そして今学んでいるのは地球上のどこのことなのか、緯度はどれくらいか、何という大陸（大洋）のどの辺なのか、何という国（県）のことなのかなどを意識する習慣をつけておきたいので1章が大切であることを忘れないでほしい。

## 3 いきいきとした人々の生活がみえる地誌

「世界各地の人々の生活と環境」では、四つの場所の市場の写真が掲げられている。

新教科書の執筆にあたって、人々の“いま”の生活をできるだけいきいきと伝えるように

心がけた。現地での取材をもとに、撮影した写真や、いろいろな人から聞ききとった「声」が生徒に伝わるような構成にしている。

新教科書に載せてあるたくさんの写真は、紙面をにぎやかに飾るためのものではなくて、本文と同じくらいに、あるいはそれ以上にそれから多くの情報を読み取ってほしいと願っているからである。

**基礎・基本となる地理的技能** 写真からどうやってどのくらいの情報を読み取ることができるかは、「写真の読み取り方」(p.21)でそのきっかけをつかんでほしい。

この新教科書には「雨温図の読み取り方・つくり方」(p.25)、「文章資料から地域の情報を読み取る」(p.29)、「グラフの読み取り方・つくり方」(p.42)、「主題図の読み取り方・つくり方」(p.43)など、基礎・基本となる地理的技能のページがちりばめられていて、自分たちで知りたいところを調べるときに活用できるように親切に解説してある。

世界の諸地域学習の前に、地理的技能を習得してほしいので、「1章 世界の姿」を設定している。

卒業した後に忘れてしまっても困らない知識を詰め込むよりは、ここに掲げたような技能を通して「地理的見方・考え方」をきちんと身につけてもらえると、生涯、旅行や仕事で新しい土地に行くときにも役に立つ技能として大事にできるだろう。

さらにつけ加えるならば、日本の「4章 身近な地域の調査」を通して自分の足と目で現地を直接観察することや、地形図を活用することなども、地理を学ぶ者ならば忘れてはならない。

各地方の最後のページにある「学習のまとめ」には学習した内容を、国(県)境と主要

な山地や河川や都市を描いた白地図を使ってまとめる例が示されている。学んだことを地図で表現するコツを身につけてほしい。

## 4 地理ではなぜ「地域」を学ぶのか

地理というのは世界中の都市や国や県などの地形、気候、人口、面積、産業などのことを暗記する科目だと思われていないだろうか。

1節(p.16~17)にある写真は、なぜ4か所だけなのだろう。地理が世界中の個々の地点を取り上げて学ばなければならないとしたら、授業時間はいくらあっても足りなくなってしまう。

次のページに進めば、この4枚の写真は、「暑い地域」、「寒い地域」、「乾燥した地域」、「高地」を代表するように選ばれていることに気づくであろう。

したがって、写真を見るときには、撮影した地点の様子だけを読むのではなく、日本と何が違うかを読むだけでなく、「暑い地域」や「高地」だからこそという特徴は何と何なのかと考えることが肝要である。

地理では、ある特定の地点のことを学ぶというよりは、広く世界と日本の全体のことを学ぼうとする。そのために世界や日本をいくつかの「地域」に分けて学習する。

「暑い地域」、「寒い地域」、「乾燥した地域」は、いわば気候の違いによって分けた地域の学習である。p.19、p.23、p.27にある世界地図で、気候による地域はおおよそ緯度によって分けられる地域であることを確認しよう。

これに対して「高地」というのはp.31の地図でわかるように緯度とは無関係で、地形(標高)によって分けられる地域である。

もちろん、人々の生活は自然環境だけで決

まっているのではない。6～8節では、人々の住居や衣服は自然環境の影響を受けた伝統的なものから変化していることや、宗教が生活や文化に影響力をもっていることを学ぶ。

「地域」というのは自然環境が似ている地域もあれば、宗教や言語や歴史が似ている地域というのものもある。

この新教科書では、「世界の諸地域」をアジア州、ヨーロッパ州・・・という六つの地域に分けて学び、「日本の諸地域」を九州地方、中国・四国地方・・・という七つの地方（地域）に分けて学ぶ。

## 5 地域をどう学ぶのか

地誌といえば、世界各地の都市や国などの地形、気候、人口、産業・・・などと決まっていた。百科辞典やWikipediaなどでは、この種の項目ごとに記述されていることが多い。このパターンの方が授業の準備もしやすいと

いう人もいよう。

しかし新しい教科書ではとりあつかい方が変化している。新しい学習指導要領には次のように書かれている。

「[[これまでは] 項目ごとに羅列的な扱いに陥りがちで、・・・地域に関する知識を覚えることに主眼がおかれる傾向がみられた」が、学び方や調べ方を重視するようになり、今回の改訂では「地域の特色ある事象を中核として、それを他の事象と有機的に関連付けて、地域的特色を動的にとらえさせることとした」とある。

新教科書ではそれがどうなっているのだろう。図1に関東地方の最初の2ページを例に取り上げた。

疑問文で始まる地誌学習 見開き2ページごとに「ねらい」と「チェック&トライ」があって、1時間の授業で何を学ばせようとするのかを明確にし、そこで学んだ知識を確認できるように工夫されている。

この地方をとらえる中核となる視点

その手がかりとなる統計・グラフ・主題図・写真

写真④と⑥はどこか

前橋は館山に比べ、冬は寒く、雨が少ない。

前橋と館山はこのどんなところか？

この時間の学習のねらい

関東地方の人口は全国の中できわだって多い。

人口密度の高い範囲が非常に広く、平野の形と一致している。

「どうして…こんなに人口が集まるんだろう。」

学習したことを確かめ、さらに追究する課題

図1 関東地方の学習の導入ページ（「社会科 中学生の地理」p.220～221）

どの地方も「○○地方はどのような地方だろうか」という疑問文の見出しで始まる。とくにキャラクターが発する疑問文には「どうして」「なぜ」というのが多い。

導入部分にあたる最初の2ページは、関東地方の地形と気候を概観するとともに、人口集中がこの地方の特色であると気づいてもらうための写真と統計・グラフと主題図などが配置されている。これらの資料を横目で眺めて通り過ぎるのではなく、前ページの図に示したように、先生も生徒も資料に即してさまざまな疑問を出し合ってみよう。

### 「地域の特色」をどうやって調べるのか

学習指導要領では、「地域の特色」ととらえるためには七つの視点があるという。すなわち「自然環境」、「他地域との結び付き」、「環境問題や環境保全」、「産業」、「人口や都市・村落」、「生活・文化」、「歴史的背景」である。関東地方はそのうちの「人口や都市」を中核として選んだ。日本の七つの地方は七つの視点のどれかを中核にするようになっている。

中核となる視点を選んだうえで、関東地方は自然条件、巨大都市、わが国の政治・経済・文化の中心、人・物・情報などが集まる交通通信網、工業や農業などをすべて相互に関連づけながらとらえ、人口集中に伴う諸問題と、それを解決しようとする人々の努力にも注意を向けている。

ある事柄を単独でとらえるのではなく、さまざまな事柄と関連させてとらえるのはむずかしいことではあるが、地理の得意とするところである。

このようにして新教科書を使っていただくと、きっと「地域的特色がなぜ成り立っているのか」という問いに対する答えが見つかるようにていねいに記述されていることをわ

かっただけよう。

## 6 地図帳を活用すること

今回の改訂では、「教科用図書『地図』を十分に活用すること」と明記された。初めてのことである。地理学と地図学の諸学会が主張してきたことなので嬉しい。

最初のうちは、教科書にでてくる地名探しでもいい。そのうちに教科書に書かれていないことまでも読み取れるようになって、楽しみが増すようになることを期待したい。

平成24年度用『中学校社会科地図』では、関東地方に10ページも割いている。たとえ教科書にある地図と同じ内容であっても、この地図帳からは、新しいことが見えてくるはずである(図2)。

巻末の統計表で、七地方別の統計などにも目を向けるとなおよい。関東地方の都県の中で、全国1位から5位を占める赤い数字で書かれているのは何と何だろうか。



図2 北関東工業地域の変化(「中学校社会科地図」p.113) <新教科書ではp.229>

卒業してから教科書を手放しても地図帳だけは大事に保存するという人が多いのも事実である。生徒の中から1人でも多く地図帳愛好家が育ってほしいものである。